地域づくり表彰

南伊勢町 二地域居住推進チーム（三重県南伊勢町）

まちを一つの家に見立てた多層的な関係人口創出モデル

南伊勢町二地域居住推進チーム

リーダー

にしおか　なほこ

西岡　南帆子



１．南伊勢町の概要

三重県度会郡南伊勢町は、三重県の中南部に位置し、町域の約６割が伊勢志摩国立公園に指定されている海と山に囲まれた自然豊かな町です。2005（平成17）年に南勢町と南島町が合併して誕生しました。面積は241.89平方キロメートル、245.6キロメートルにおよぶ美しいリアス海岸を有しています。

古くからまき網漁業や鯛・マグロ等の養殖漁業を中心とした水産業が盛んで、三重県一の水揚げ高を誇るほか、温暖な気候を活かしたみかん栽培などの一次産業が基幹産業となっています。町内には38の集落が点在し、独自の自然や歴史、温かい人情味あふれる農漁村文化が根付いています。



伊勢志摩国立公園にある見江島展望台

２．活動開始の背景・経緯

南伊勢町では急激な人口減少と少子高齢化が進行しており、生活扶助や集落機能、基幹産業の維持が深刻な課題となっています。町はこれまで行政主導の移住定住施策に取り組んできましたが、集落の持続には行政の枠組みを超えた民間主導の柔軟な受け入れ体制と、外部の人材を包み込む「関係人口」の創出が不可欠でした。

こうした中、町内に根付く「知らない人にもおやすみと声をかける」家族のような温かい町民性を下地とし、他者を受け入れ挑戦を応援する土壌を育みながら、持続可能な地域生活圏を再構築することを目指して本取組が開始されました。



南伊勢町二地域居住推進チームメンバー

３．団体概要

本取組を推進する「南伊勢町二地域居住推進チーム」（リーダー：西岡南帆子）は、地域で個別に地道な活動を重ねてきた民間３主体と行政による官民連携コンソーシアムです。空き家再生と居住支援を担う「NONKI合同会社」（以下「NONKI」）、水産業の担い手育成を推進する「一般社団法人フィッシャーマン・ジャパン（以下「FJ」）、10年以上にわたり学生と地域を繋ぐ「学生団体 南伊勢の扉（以下「南伊勢の扉」）」、そして制度・インフラ面を支える「南伊勢町役場」で構成されています。

2024年度の「ふるさとワーキングホリデー」での連携などを経て、2025年５月にコンソーシアムを結成。同年７月にはNONKIが町初の「特定居住支援法人」に指定され、個々の活動（点）が官民連携（線）となり最新制度（面）へ昇華した持続可能な推進構造を確立しています。

４．活動への思い

私たちの活動の核にあるのは、「どれだけのものを持っているかではなく、どれだけのものを人と分かち合えるか」という問いと想いです。ごはんは一人よりみんなで食べたほうが美味しく楽しいように、地域にある家や仕事、暮らしの豊かさを分かち合うことで、人は温かくつながることができます。

私たちが目指す二地域居住は、単に「もう一つの住所」を増やすことではありません。「移住していないのに『おかえり』と言われるまち」、すなわち「もう一つの帰る場所」を地域のみんなで育てていく取り組みです。新しい大きな施設を作るのではなく、既存のまちの資源をつなぎ直し、「まち全体を一つの家」に見立てることで、外から来た人が単なる「客」で終わらず、家族や仲間として深く関われる温かな関係性を育んでいます。

５．活動の内容

【まちを一つの家」に見立てた多層的な拠点のネットワーク化】



うみべのいえキッチンでのシェアキッチンの様子

町内に点在する空き家や店舗を機能別の「部屋」に見立てて再生・連携させています。挑戦や小商いの場「キッチン（シェアキッチン）」、中長期滞在や多世代交流の場「リビング」、手仕事やお直しの場「クローゼット」、アート表現やゆるやかな混ざり合いを生む「アトリエ」などを順次整備しました。



うみべのアトリエ壁画プロジェクトに参加する若者

あわせて「暮らしの案内所」を開設し、移住や二地域居住の相談をはじめ、地域の仕事や暮らし、住まいに関する悩みにワンストップで対応する窓口機能を整えています。

これらにより、商店が消滅した地域における購買･飲食機会の再生や、高齢住民の外出・交流機会の創出、さらには移住・関係人口の相談支援に至るまで、地域生活圏の利便性やコミュニティ機能の自律的な回復に大きく寄与しています。

さらにデジタル上のハブ「南伊勢の縁側」を開設し、来訪前から帰宅後まで日常的なコミュニケーションを継続できる環境を整えています。

【入口を一つにしない「関係人口の階段」と多層的プログラム】

地域に関わるきっかけやニーズは人それぞれであるため、入口を単一化せず多様なプログラムを用意しています。NONKI が暮らしや小商いの試行をサポートし、FJ が「漁師塾」や「ふるさとワーキングホリデー」を通じて一次産業への関わりをつくり、南伊勢の扉が都市部の若者や学生の滞在・コミュニティ形成を伴走支援しています。各主体が参加者を自団体で囲い込まず、その人の興味や成長に応じて「次の関わり」へバトンパスする連携を徹底しています。



ふるさとワーキングホリデーに参加する若者

１回限りのイベント参加からスタートし、みかんの摘果や農業・漁業の援農、地元事業者との新商品企画、真珠プロジェクトや味噌づくりワークショップなど関わりを深め、最終的に「稼げる二地域居住」や新規漁業就業、移住・定住へと段階的に繋がる「関係人口の階段」を設計・運用しています。



援農インターンの様子

【現役の二地域居住実践者による伴走と受け入れ環境整備】

受け入れの不安を解消するため、コアメンバー自らが「地域活性化起業人」や「集落支援員」等の制度を活用して二拠点生活を実践しています。実践者が現場で住民との信頼関係を深め、心理的安全性の高い受け入れ環境を醸成しています。その上で、暮らしの案内所で物件探しやコミュニティへの繋ぎ込みまでワンストップで伴走しています。



二地域居住者（地域活性化起業人）のもとに滞在する若者

６．成果

一連の取組により、シェアキッチン「うみべのいえキッチン」には累計 100 事業者以上が出店し、うち５件が町内で実店舗やキッチンカーとして独立創業を果たしました。年間延べ 600 名以上が滞在拠点を活用し、初年度の「ふるさとワーキングホリデー」参加者の再訪率は約７割に達しています。

また、漁師塾等を通じて３名の新規漁業就業者を生み出し、タイ養殖事業者での事業承継や新規雇用の動きにつながるなど、基幹産業の担い手確保に大きく貢献しています。

さらに、消滅しつつあった買い物の場や多世代の居場所が再生され、地域の生活扶助とコミュニティの自律的な再生に大きな効果をもたらしています。

７．今後の展望

今後の課題は、次世代を担うリーダー層の継続的な育成と、補助金や助成金に過度に依存しない自主事業（体験ツアーや地場産品開発など）による収益基盤のさらなる強化です。

また、滞在者の夜間交通インフラの本格実装や、住まいの選択肢となる空き家改修のスピード向上が求められています。



南伊勢 暮らしの案内所とうみべメンバー

今後は「特定居住支援法人」としての機能を本格稼働させ、空き家バンク運営や移住・二地域居住コーディネート、関係人口の創出を一層推進してまいります。

「まち全体を一つの家」として、町外から訪れる人々を客ではなく「家族」として包み込み、多様な挑戦と関わりが生まれ続ける「帰ってきたいまち」の実現に向けて取組を進めていきたい、私たちが想う未来への展望です。